

ICMM-2016 報告

第 15 回分子磁性国際会議 (International Conference on Molecule-Based Magnetism) は 12 年振りに日本での開催となり、仙台を舞台に国内外から 490 名の参加者を集めて 2016 年 9 月 4 日～8 日の日程で行われました。会場となった仙台国際センターは東北大大学キャンパスの山裾、広瀬川のほとりに位置し、都心部とは地下鉄で結ばれた利便のよいところで、レセプションのあった初日 4 日には海外からの参加者が隣接する青葉山公園を三々五々にそぞろ歩く姿が見られました。東北らしい大樹も多く、足下には杣の実が転々とする気持ちのよい石畳を楽しんでいました。その晩には、一般市民にも公開された十倉好紀教授の特別講演“Magnetism and Topology” が行われました。

翌 5 日からは本格的にセッションが始まり、4 件のプレナリー講演、大川尚士名誉教授(九州大学)、W. Wernsdorfer 博士(ネール研究所、仏)、J. R. Long 教授(UCBK、米)、A. Heinrich 博士(IBM、米)の中でも、冒頭を飾った Olivier Kahn Memorial Lecture は大川名誉教授のシュウ酸架橋異核錯体系の集大成とも言えるもので、今では分子磁性分野の常識となった軌道直交性を利用した強磁性的相互作用の分子設計を数々のランドマーク的な錯体を示しながら解説されました。キーノート・招待講演では、やはり王道とも言うべき磁気-構造関連・希土類磁石に関するものが 15 件と多く、スピンドロスオーバー系・原子価互変異性系や有機ラジカル系の報告は根強く 5 件ずつ程度、SMM・磁気異方性や MOF に関する報告がそれぞれ 2～3 件と収束気味であるのに対し、spintronics・spin qubit など表面実装に関連する報告が 10 件を超えて成長分野となっているのが、前回の ICMM-2014 に引き続き特徴的でした。

6 日の午後はエクスカーションに充てられ、参加者は平泉中尊寺や松島の遊覧船観光など、いくつかのコースに分かれて親睦を深めました。筆者の加わった松島コースでは多くの参加者が出港を待ちながら、震災から復興して拝観を再開したばかりの瑞巌寺を見学し、大陸ぱりの磨崖仏や伊達家ゆかりの文物に目を楽しませていました。天候にも恵まれ、遊覧船にあっては、写真を趣味にもつ M. Verdaguer 教授はじめ多くの外国人がデッキに陣取り、奇景にシャッターを切ることしきりでした。

今回、筆者は 4 歳の長女を連れての参加となり、毎朝ホテルから事務局に紹介された保育園によってからの通勤となりましたが、仙台は便利な街で困ることはまったくありませんでした。社会環境に恵まれていることをつくづく実感した次第です。次回の ICMM-2018 は、リオデジャネイロを会場として南米での初開催が予定されていますが、それまでに分子磁性の分野がまたどのように形を変えているのか、また、われわれのセンターからどのような寄与ができるのか、たいへん楽しみにしています。

(中野元裕)



国際会議会場



エクスカーション